



アームとプラッター
右横に装着されている大きな鉄製のアームは標準装備のRCA Universal Tone-arm MI-11870で、78 RPM の2.5mil standard groove 16"トランスクリプションディスク専用である。そして奥はオプションで取り付けられたGrayのType-108 オイルダンパアームで、カートリッジはGE バリレラが装着されている。また手前左のツマミはON/OFFスイッチ、右はイコライザーアンプ用のツマミである



33 2/1 RPM or 78 RPM 切り替えレバー。モーターの回転を止めた状態でのワンタッチ切り替えが可能



プラッター
外側の直径は445mmあり、分厚いアルミダイキャスト製でプラッターの上部にはフェルトが張られている



MI-11801-B キャビネット

天板と足下部分は木製で正面の扉と外側まわりは全て鉄製となっている。色は初期のLC-1等のスピーカーユニットやMIシリーズのアンプ類と同じカラーリングで塗装されている。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げていこう。

第21回 **RCA**
16"ターンテーブルの世界②

前回に続けてRCA社製 TYPE 70-D 16"アナログターンテーブルをご紹介しよう。今回はその初期モデルにあたるもので、とても希少なダイレクトモータードライブ駆動のターンテーブルである（前回ご紹介したのはリムドライブ式）。当時、ダイレクトモータードライブターンテーブルは、Prestoやfairchild、scully 社などでも生産されており、その正確でトルクのある回転により、ブルーノート盤にもヴァンゲルダーが好んでレコードカッティング用に使ったことで知られている。

本文／**田中伊佐資**
製品解説／岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影／小林幹彦(彩虹舎)

RCA 70D

1930年代頃にラジオ局、スタジオ用に開発されたプロ用のダイレクトドライブターンテーブル 70-type の最終型で、50年代後期まで生産された。前回紹介したリムドライブ式の回転方式とは 比べ物にならないコストがかかるダイレクトドライブ方式を採用している。駆動方式はワンモーターのギアドライブとなっており、33 2/1 と 78 回転に対応。当時は72D record cutting attachmentを搭載しており、レコードカッティング用のターンテーブルとしても使われていた。



Retro-Future
古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

RCA
16"ターンテーブルの世界②



RCA 70-D 内部。ギアドライブ用のRCA製モーターと重量級のフライホイール、キャビネットの内側には吸音用と思われる厚みのあるフェルト材が張られている

RCA TYPE 70-D 当時のカタログ



アメリカの放送局仕様、16インチ・プラッター・シリーズ第2弾。RCAのTYPE 70-Dの登場だ。前回のBQ-2Cと見かけはそう変わらないように見える。書き手としては、直径40cm越えプラッターはデカイぞとおんなじことを書けないから、これでは困る。しかし、まるで金庫のようなトビラを開けると、まったく違う光景が待っていた。

中央には巨大モーターがごっついボールトで据え付けられている。ターンテーブル用としてイメージするモーターの概念がくつがえった。そこから極太シャフトがプラッターに向かって直立している。途中で装着しているフライホールがこれまた超弩級サイズ。回転したらマジで危ないんじゃないか。このタイプは横軸で運動するモーターを縦軸(シャフト)に変換するギアがあるため通称ギア・ドライブと呼ばれているらしい。

アトリエJe-teeの岡田さんがプラッターを外すと、本体側に同心円状にいくつかの輪っかが組み込まれていて、輪の間にベアリングが押し込まれている。モーターは常に78回転で回り、このベアリングが転がることによって33回転に減速する。まさにアナログな仕組みだ。しかし正確な回転数を維持するのは難しいはずだ。さてどれくらいの誤差があるのかと、意地悪くストロボ・スコープでチェックしたいと岡田さんをお願いしたら、ストロボは見事にビタツと止まった。

おそるべき余裕、感嘆すべき底力
すべてが想像以上のDDD駆動式

程度がいい個体で、しかもきっちり調整ができていようだ。

原始人の石器のような、物すごい雰囲気を持った右のRCAアームはメンテ中とかで、グレイ108とGEバリレラのコンビで、モノラル盤を聴いていく。前回、美空ひばりのSPを持参したカメラマンの小林さんが、今度はがつりジャズを持ってきた。

「好きなのをかけてください」と言われたので、ポール・チェンバースの「ベース・オン・トップ」で始めてみた。冒頭「イエスタデイズ」のベース弓弾きオン・パレードは、オーディオがしょぼいと実に退屈な演奏だ。いきなりブハーと深々とした低音をジェンセンが吐きだしてどっつきりした。おそるべき余裕、感嘆すべき底力。すべてが想像以上だった。弦の響きもいい。続くロリンズのヴァンガード・ライヴも思いっきり張り出してくるテナーに圧倒される。トミー・フラナガンの「オーヴァーシイズ」もエルヴィンがドラムと大格闘だ。

しかしこの日も大トリだった美空ひばりに全部もっていかれた。例の「港町13番地」のSP。すごいリアルティ。声や伴奏がそこに立ち、勢いよく迫ってくる。小林さんは「こんなひばりは聴いたことない」と感嘆しながら、間わず語りに「うーむ、置くところがないか。いや待てよ」とややその気になっている。小林さん、思い立ったが吉日だと思います。